

を今も思い、戦友会を結成し、平成十二年六月九日は、釜石で第二十二回の戦友会を開催しております。

運命か、ニューギニア

五十一師団生き残り

群馬県 温井 一衛

昭和十七（一九四二）年三月卒業予定で宇都宮高等農林学校に学んでいた私は、時局重大な折から繰り上げ卒業となり、昭和十六年十月に卒業し、父母と妹三人と弟の六人を残して昭和十七年二月一日、高崎の東部第三十八部隊（歩兵第一一五連隊補充隊）に入隊しました。

留守宅には父のほかには男手がなくなり、どうなるのか心配でしたが、妹三人が力を合わせて家業の農業を引き継ぎ、米・麦・野菜の耕作に励んでくれることになり安心して入隊できました。

当時の日本は開戦早々の大戦果に酔っていました。

高崎の連隊は強豪第十四師団の一角を担う伝統部隊で、満州チチハルで対ソ戦に備えており気合十分でした。

内地留守隊でも初年兵教育は厳しいものでした。三カ月の一期の教育が終わると幹部候補生を命ぜられ、三カ月の特別教育のあと甲種幹部候補生を命ぜられ、下級将校としての教育訓練を受けるべく、五月十日、前橋陸軍予備士官学校に入校、相馬ヶ原で過酷な教練を受けました。

その頃南方海上では、六月五日に帝国海軍がミッドウェーにて大敗北を受けていたとは夢にも知りませんでした。当時は極秘で我々が知るはずもなく、対米英戦に備えて相馬ヶ原の原野を駆け回っていました。

十月に同校を卒業、見習士官となり、第五十一師団（基）歩兵第一一五連隊勤務となりました。昭和十七年十二月、第五十一師団は南方派遣となり、十二月二十五日、宇品港を出港、三十一日、九州佐伯港で八隻の輸送船団を編成し出港、ラバウルに向かいました。当時ガダルカナルの戦況は厳しく撤退寸前の戦況でし

た。一見習士官の私が感知できる事柄でもありませんでしたが、今から考えると危地に飛び込んでゆく状況だったことを知りゾッとします。

時速八ノットの極めて遅いスピードで目的地ラバウルに着いたのは昭和十八年一月二十四日ですから、船上生活は二十四日間での調子もガタガタでした。

ラバウル南方二〇キロのピララが駐屯地です。ここで歩兵第一一五連隊第一機関銃中隊の第二小隊長を拝命、ニューギニア派遣を控えて訓練に明け暮れました。

現地の兵舎は屋根はヤシの葉、床は篠竹のニッパハウスです。床は竹の節だらけで痛いので草を敷き詰めて寝ました。

私は近く内地から到着する予定の初年兵の教官要員を命ぜられました。この命令が私の人生で大きな岐路となるのは当時思ってもいませんでした。

三月一日「八十一号作戦」が発動され、第五十一師団七三〇〇人は八隻の輸送船に分乗、午前〇時三十

分、悪天候に乗じてラバウル出航、ニューギニアを目指しました。私は同僚戦友と共に行くことを上申しましたがが許されず、教官要員二十人と共に残留を命ぜられたのでした。

第三十三軍司令官・安達二十三中将、参謀長・吉原少将は駆逐艦「時津風」に乗艦、第五十一師団長・中野英光中将は「雪風」に座乗。兵員、弾薬、糧秣は全て三分の一が海没を予想して輸送船八隻に平均に分散して乗船、積載するという海没覚悟の悲壮な船出でした。

米軍の偵察機は毎日ラバウルの上空を舞い、出航を見張っていたので、出航の翌日三月二日の朝、船団はB17の攻撃を受け、先頭の「旭盛丸」が真っ先に爆沈され、駆逐艦二隻が八百余人を救い上げ、全速力でニューギニアのラエに丸腰で上陸させたそうです。

ダンピール海峡にかかった三日の午前八時、戦爆一二〇機の大空襲を受け、残る輸送船七隻全部と駆逐艦三隻も轟沈、二隻が中破、文字通り壊滅されました。船積みされた弾薬、糧秣二、五〇〇トンも全部海の藻

屑となりました。

將兵三、六四四人が溺死、二、四二七人はラバウルに帰りました。その中に安達軍司令官、吉原參謀長の姿がありました。

私の第一機関銃中隊も三分の二が海没しました。第一一五連隊長・遠藤寅平大佐も漂流中亡くなり、軍旗は折り畳み式舟艇に乗って三十日間漂流、その間十二人のうち十人が死に、残った二人が生き残り、ニューブリテンの南岸に漂着しました。そして軍旗は無事保持して、二人は感状を受けたそうです。悲報を受けた私は、亡き同僚、戦友、部下の顔が眼前に浮かび、当分の間ショックから脱けられませんでした。

三月二十八日、いよいよ私達の出番が来ました。夜深く駆逐艦三隻に分乗、ココボ港を出航、敵の魚雷艇を警戒しつつ島伝いにニューギニア東端のフィンシハーヘンを目指しました。「八十一号作戦」での悲惨な海上を通過、三十日に上陸しました。

四月十二日、守備隊が待つラエに向け出発、敵空軍

を避けて夜行軍の連続です。南海の夜は暗く、前を行く兵の背囊に手は届くが暗闇で見えぬほどで、南の夜の暗さは想像を絶しました。

夜行軍の連続二週間で、四月二十六日やっとラエに到着、輸送船がダメなので潜水艦輸送に切り替わり、その荷揚げが毎日の仕事です。生活物資は目に見えて少なくなり、一日一人当たり白米一合になりました。食事も雑炊が一日二回に減りました。腹が減って夜目が冴えて寝られず、毎日が食糧探しです。

ニューギニアは日本の真南にあるせいか生態系が日本と似ていて、猛獣や毒へびはいませんでした。松の木もあります。大きなカマキリ、バナナの樹の芯(野生のバナナは食べられない)、野草、小さいワニ(約一メートル)などが貴重な食糧でした。大きな樹の幹に赤いイチゴがついていました。

それからラエを出てサラモアへ援軍に行く直前の六月十三日、私はマリアに罹り、大腸カタルを併発し、ラエの野戦病院に入りましたが薬がありません。

そのうち高熱のため脳症を起こし人事不省になってしまいました。手当ての末、正気に戻りましたが後方に転送となり、大発に乗せられ、敵の魚雷艇を避けながら夜は島伝いに走り、昼間は島陰に隠れて、八月三日、ラバウルの赤根岬の第九四兵站病院に転院しました。

ラエの野戦病院は、私が出た直後米機の爆撃で木端微塵にやられたそうです。屋根には赤十字のマークが大きく示されていたにもかかわらずやられたのでした。恐らく私が出た時、入っていた患者もろともやられたと思います。

この病院にはガダルカナルから還った兵隊が入院していましたが、飯盒一杯の飯を一度に食べるので「そんな急にいっぱい食べると死んでしまうから止めなさい」と注意したら「死んでも良いから」と言ってお腹いっぱい食べ続けたそうです。

この病院には京都編成の日赤看護婦さんがおられました。今まで黒や赤茶色の顔ばかりを見てきた目には、白い顔は観音様に見え、患者の間では「ラバウル観

音」と名付けていました。戦場でのやすらぎのひとつでした。

八月十九日、ラバウル発の病院船「ブエノスアイレス丸」でフィリピンのマニラ西方のケソン市の、南方軍第十二陸軍病院第一分院に転院しました。

ここはRC造りの大学を接収した立派な建物でした。乗船した「ブエノスアイレス丸」は私が旧制中学時代の修学旅行で四日市から横浜まで乗った旅客船で、思い出深い船でした。その時は一番下の客室で丸窓のガラスに波しぶきがかかっていたのを覚えています。この船も次の航海で潜水艦にやられたそうです。

九月二十一日、マニラを病院船で出航、二十八日、宇品上陸、十月九日、高崎陸軍病院に転院、十月二十八日、退院、原隊の第一一五連隊補充隊付となりました。十二月一日、陸軍少尉に任ぜられ予備役編入、引き続き臨時召集されました。

内地防衛要員として新設師団に転属することになり、昭和十九年七月十三日、第八十一師団第一七三連

隊（納）第一機関銃中隊付を命ぜられ、鹿島灘付近の陣地に行くはずのところ宇都宮の師団參謀部勤務になりました。そこでは北関東地方の兵要地誌作りに参加を命ぜられ、五万分の一の地図を見ながら自動車で現地にゆき、実地検分をする役目につきましました。本土決戦が叫ばれてきた頃でした。師団長は留守第五十一師団長だった古賀健中将でした。納師団は装備が優秀で、小隊の重機も倍の四丁ありました。

昭和二十年四月十八日から師団兵器部勤務となり、兵器の現地生産の担当者として、參謀長を主幹とする対戦車刺突爆雷等の生産に携わりました。八月一日付で陸軍中尉となりましたが、二週間後の八月十五日の終戦の大詔により、九月八日召集解除、復員となり、以来自宅で農業に従事、現在はマンション経営をやっています。

以上私の軍隊歴をお話ししましたが、あの時少し遅れたら今の私が存在するだろうか、という偶然が何回も重なっていることが不思議でなりません。病院生活が長く、決して誇れる戦争体験ではありませんが、

「八十一号作戦」に参加できなかったために生き延びたことが一番大きな偶然だとすれば、亡き戦友、同僚及び部下の霊が私を救ってくれたのだと思ひ、英霊に感謝の誠を捧げる次第です。

ちなみに私の最初の中隊である第五十一師団（基）第一一五連隊の第一機関銃中隊の終戦時の生存者はわずか二人です。

私がラエで入院した後の第五十一師団（基）は、あの高さ四、五〇〇メートルのサワラケット山越えを敢行、二、二〇〇人死没の悲劇に遭遇し、終戦までの死亡率九八・六三パーセントという悲惨な道をたどりました。そのほとんどが餓死といわれています。

「ビルマ」戦線

船舶工兵隊

島根県 星野安雄

島根県の中央山間部の木次町日登の田畑八反を耕作